

# 命と魂の食事

——『ソウル・フード』試論——

勝 田 薫

## 要 旨

シカゴの黒人中流家庭が様々な問題を乗り越えてゆく様子をコメディ・タッチで描いた1997年度公開の映画『ソウル・フード』を、学際的アプローチにより分析する。ソウル・フードの定義や今日の黒人中産階級の抱える諸問題にも触れる。

日本公開時には話題にもならず終わったこの映画を未鑑賞の読者も多いであろうから最低限のプロットはたどろう。しかし、拙稿の力点はあくまでも、兄と二人暮らしの老未亡人と成人した三人の娘たちの各々の家庭を含む拡大家庭が直面する現代特有の都市問題を解決する際、黒人の民族遺産たるソウル・フードが役立つか否かという当該作品の中心テーマの分析に置くこととする。見終わった多くの観客が中途半端なコメディだとの印象を受ける原因にも言及する。

## 1 ソウル・フード

現代のシカゴに住む中流の黒人家族を描いた映像作品『ソウル・フード』は、1997年にアメリカで公開され4300万ドルもの興行収入をあげた。それに先立つこと二年、成功したキャリア・ウーマンである黒人女性たちが自分にふさわしい男性を求めて苦勞する経緯を描く『ため息つかせて』も好評で迎えられていた。ほぼ全員が黒人キャストでありしかもごく普通の黒人中産階級の暮らしに題材を求めた映像作品が支持を受ける時代になっていたのだ。しかしながら日本では事情が異なった。本国に引き続き我が国でも上映された『ソウル・フード』はそれ程話題にならずに終わった。映像作品の題名であるソウル・フードとは日本人にとって耳慣れない言葉であったに違いない。ソウル・フードとはアメリカ黒人社会では奴隷制時代から現代に伝えられている家庭料理の総称である。その食材にせよ調理法にせよ、白人主人からあてがわれる配給食糧がはなはだ乏しかったので奴隷たちは生きのびる為に食生活に様々な工夫を凝らした。ソウル・フードは奴隷の独創性の成果であったのだ。

十九世紀、奴隷として生まれながら北部に逃亡し後に高名な奴隷制廃止論者となったフレデリック・ダグラスは自伝の中で、自分が生まれ育ったメリーランドの農園での暮らしぶりについて述べている。彼の主人の所では毎月の食料として「八ポンドの塩漬けの豚肉またはそれに相当する魚、そして一ブッシェルのひきわりとうもろこし」が支給された<sup>(1)</sup>。成人奴隷一人に対する配給食糧は農園の主人が自分の奴隷の栄養状態に関心があるかないかで多少の差が出るものの、大半はひきわりとうもろこし一週間分と塩漬け豚肉あるいはベーコン数ポンドであった。栄養学が未発達な南北戦争前の南部においては、この著しくバランスを欠いた食事では奴隷には十分だと考えられていたのであった。この二種類の食べ物には油分が多く含まれていると信じられており、奴隷が労働する際には理想的なエ

ネルギー源であるとされていた。粗末なたんぱく源を補う為奴隷たちは罌を作ってアライグマやフクロネズミやリスなどを捕えた。これらの食材を用いたレシピは現存してはいるが、一般的な食材ではない。何といってもソウル・フードの主役は豚肉である。トロッターと呼ぶ豚足や皮や生殖器に至るまで豚のあらゆる部位を利用した調理法が考案された。有名なチトリングスは豚の小腸にスパイスを効かせて長いこと煮込んで作る。黒人奴隷は自分たち同様白人に差別を受けていたインディアンとは早い時期から交流を持っていたので土地固有の野菜やハーブの使い方を教えてもらってソウル・フードに応用することもしばしばだった。又アフリカから連行されてくる時にオクラやゴマ、ササゲやヤム（甘芋）を種子で持ち込みプランテーションで栽培して食材とした<sup>(2)</sup>。ソウル・フードは使用するスパイスの多様さでも有名だが、カリブ海域からはチリ・ペッパーが、西アフリカからはマラゲーニャ・ペッパーが持ち込まれた。豚肉と並ぶ主食であるとうもろこしは粉にして粥状のシリアル（グリッツ）にしたり練ってキャベツの葉で包み熱い灰に埋めて焼いたりして、奴隷の創意は調理法にいかんなく発揮された。

奴隷は自らの為にソウル・フードを作るだけでなく、主人の台所のコックとして白人の食卓にソウル・フードを載せもした。黒人は自分たちのレシピに白人の調理法も取り入れて新しいレシピを生み出した。ペカンのマフィンや果物のパイはこうした料理の新しいレシピの例である。白人たちはソウル・フードが気に入らず奴隷は白人女性にその調理法を伝授した。

南北戦争後より良い生活を求めて北部工業都市に移住していった黒人によりソウル・フードは北部にも伝わることになる。しかしソウル・フードが一躍知られるようになったのは1920年代にニューヨークのハーレムが最新流行の町となり多くの白人がハーレムに入りこんでいったときだ。白人たちはハーレムに立ち並ぶソウル・フード・ジョイントで黒人の料理を堪能した。

南部白人女性が継承した黒人の伝統的家庭料理は長い間単に南部料理とだけ呼ばれていた。ソウル・フードという表現が広く用いられるようになったのはブラック・ナショナリズムが台頭した1960年代だ。典型的なソウル・フードはマカロニにバターや溶き卵をたっぷりまぶしてチーズと焼くマカロニ・チーズや豚足といんげん豆の煮込みであり、これらはいずれもきわめて高カロリーで、これでは成人病も心配だ。実際、映像作品『ソウル・フード』のママ・ジョーは食生活が原因で糖尿病となり片足を切断するはめになる。

映像作品の中で一家の三女ロビンは母であるママ・ジョー（家族はビッグママと呼ぶ）に「いつも豚足やベーコンばかり」と文句をいう。母は娘時代に故郷のミシシッピで覚えた料理をシカゴに出てきてからも何十年も作り続けるが、現代っ子の娘はソウル・フードの歴史を何も知らないのである。ビッグママは娘にソウル・フードの歴史を話して聞かせる。ソウル・フードとは白人が食べずに捨てようとした臓物などの食材を料理して味の良い食べ物としたもので、それは黒人の逆境に対する勝利の一形態に他ならないことを。たとえばソウル・フードにポット・リッカー（鍋湯?）というものがある。南部の白人は野菜を煮た後の煮汁を捨てていたが黒人は捨てずに野菜と一緒に食べた。白人は煮汁を豚と黒人が食べるものとしてさげすんだのだが、奴隷はそこから栄養とうまみをとった。そして次第に南部白人も黒人にソウル・フードを教わるようになる。1970年代の人気グルー

プ「スリー・ディグリーズ」の一員だったシェイラ・ファーガスンはソウル・フードに関する著書の中で叔母から聞いたエピソードを紹介している。それはポット・リッカーを黒人と共に食べてみてその良さを知ったブア・ホワイト（南部の白人貧困者層）が自分たちでもポット・リッカーを作ようになったというもので黒人が南部の白人にソウル・フードを伝えていった一形態を知ることができる<sup>(3)</sup>。

奴隷たちは読み書きを習うことを禁じられていたのでソウル・フードの作り方は世代から世代へと口承で伝えられていった。ニューオリンズなどにおいてはフランス人・スペイン人入植者の食文化に触れてクレオール系ソウル・フードも出現した。元旦や収穫感謝祭といった祝日には独特のソウル・フードが考案された。そのうち最も有名なのはホッピン・ジョンと呼ばれるササゲ豆と豚足と米の料理であろう。ホッピン・ジョンは広く南部で元旦に食べる新年の幸運を願う料理である。映像作品『ソウル・フード』における時の移り変わりもさまざまなソウル・フードによって記録されてゆく。映像作品の終末近く、ビッグママの三人の娘たちは亡き母の伝統を受け継いでナマズのフライやカキバ・カンランやホッピン・ジョンを用意する。姉妹の仲違いの為、長く絶えていた日曜のディナーの習慣を久々に復活させてのことである。作品中では季節は冬だがいつとは明示されていない。しかし富をもたらすとされる米と野菜と魚、幸運を願うササゲ豆を食材として使っていたので作られていたのが伝統的な正月料理の品々だとわかる。不仲な三人姉妹は互いにあまり口はききあわせないものの、見事に呼吸はあっており、ゆるぎなく食事の準備を進めてゆく。家族のきずなを再確認する為に生前母はなによりも日曜ごとのディナーという儀式を大切にしていたが、娘達がそれぞれ独立した後は金銭問題をめぐってディナーは口論の場となりがちであった。今日の都市生活者にとってソウル・フードを分かち合うことは最早意義のあることではなくなりつつある。民族の活力を体現するビッグママは黒人の窮状を象徴するごとく映像作品の大半は病に冒され病院におり、画面には不在のままである。一族が互いに支えあう大切さを思い出させる手段として家族特有の儀式が再現できるかどうかを映像作品『ソウル・フード』は追求しているのだ。

## 2 今日の黒人中産階級

ビッグママは十年間も自室に引きこもっている兄のビートと二人暮らしの未亡人であり、三人の娘たちは各々家庭を持った今も母の近くに住んでいる。このうち社会的に最も成功しているのは離婚歴のある長女テリーである。テリーは勤務する法律事務所で共同経営者のオファーを受ける程やり手の弁護士であり、自分と同様な有能な同業者と再婚し二人は夫マイルスが趣味で行っているバンド活動の為にスタジオを屋上に完備する程の豪邸で暮らしている。次女マキシーンはテリーの恋人ケニーと恋愛し大学を中退して彼と結婚する。現在は三人の子供がいる専業主婦で夫は仕事も順調、平穩無事で幸せな家庭生活を送っている。新婚の三女ロビンはテリーに資金を借りて黒人客相手の美容院を開き、店ははやっている。ビッグママが「家族は団結が大事」という家族はこの娘たちのそれぞれの家族を含む大家族のことである。テリー夫婦は例外的に豊かであるが、それ以外にここに登場するのは皆平均的な中流の家庭だといえよう。映像作品の理解を深める為に黒人中流階級の現状をみるこ

とにする。1965年のアフーマティヴ・アクション（積極的差別修正措置）により確かに黒人の就業機会は増大し、今日では多数の黒人家庭が中産階級の仲間入りを果たした。1990年度の職種ごとの新規採用者数を見ると、たとえば警察官の黒人比率は約41パーセント、銀行の窓口係は約16パーセントと高い。1960年に全弁護士中で1.3パーセントにすぎなかった黒人弁護士も1990年には3.2パーセントと二倍以上に増えている。しかし黒人の大学教員は1990年までの三十年間で0.1パーセント増えたにとどまり、医師は1960年の4.4パーセントから1990年には3パーセントへとむしろ減少している。アフーマティヴ・アクションにより政府及び公共機関に於ける黒人雇用は確かに進んだが、1970年代以降は不況によりこうした部門での就労機会は減少した。さらに企業はアフーマティヴ・アクションを取ることに消極的になりつつあり、もともと経済的な基盤が弱かった黒人中産階級は雇用面で深刻な打撃を受けている。又民間企業においては黒人の経営する会社はたいてい黒人顧客を相手にしており白人から利潤を得るまでに至っていない。1995年の時点で働く黒人の半数は中産階級に典型的な仕事に就いてはいるものの、職種は販売や事務などの下層中流階級のものに偏っている。総じて最早白人が魅力を感じなくなった仕事で黒人の就労チャンスが増したにすぎないのだ。

中流化した黒人が更に望ましい仕事を得ることも容易ではない。1980年代後半でホワイトカラーの職を持つ白人の半数以上がよりレベルの高い仕事に移行することができたのに、黒人ホワイトカラー層でそうした移行に成功したのは30パーセントにとどまっている。黒人は職種のレベル・ダウンの危険性のほうがより高いのだ。白人と黒人の所得格差が縮まらないことも長いこと指摘されてきてはいるが、2000年度でも黒人男性の中位収入は白人男性のおよそ七割である。黒人女性は白人女性の約84パーセントは所得があるので状況は黒人女性のほうが有利だといえよう。結婚した後も働き続ける女性は人種にかかわらずに増えているが白人女性はパートタイムで就労することが多い。しかし男性にしろ女性にしろ白人より収入が少ない黒人家庭において妻はたいていフルタイムで働く。そうすることによってかろうじて中流の生活レベルを維持できるのだ。

アメリカにあっては社会的に上昇する為には高学歴が必要なので、アフーマティヴ・アクションによって大学に進学する機会が増大したことは黒人に有利だと考えられている。ところが大学卒の黒人男性は大学卒の白人男性の所得が1000ドルの時798ドルの所得しかない。黒人の就労条件は歴然と悪いのだ。更に住居地区の問題がある。北部の都市圏では白人の多く住む裕福な郊外と貧困層の集中する中心都市の間に中産階級の黒人の住む地域がある<sup>(4)</sup>。貧困層は中流黒人の住居区に流入してくるので中流黒人の住宅地といっても中流白人の住宅地と異なり生活レベルや価値観は同質ではない。失業率や貧困率は年々増加の傾向にある。中流黒人は貧困層とさまざまな公共施設を共用することとなり接触の機会もそれに伴って多くなる。

こうした地域では犯罪の多発や公共学校のレベルが下がり続けるといった問題を抱えている。財力があればレベルの高い私立学校に子供をやることはできる。しかし親は子供にいつも監視の目を注ぐことはできないし、ラップなどストリート・カルチャーの影響は若い人々にギャングの魅力的な一面を強く印象づけた。貧困地区と隣接している事で黒人中流家庭の子弟が受ける非行への誘惑は白人中産階級居住区とは比較にならぬ程大きいといえる。

### 3 命と魂の食事

奴隷制の下では主人の家のコックとして、又南北戦争後は白人家庭のメイドとして黒人女性はソウル・フードを作り続けてきた。メイドは黒人女性に開かれた数少ない就職口だったからだ。1960年にはメイドの、実に半数以上を黒人が占めていた。1990年には黒人はメイド人口の25パーセントに減少したが、ホテルや病院でメイドや下働きをする人々の25パーセントは黒人である。一般の家庭で白人に使われるよりは、公共施設でビジネスライクに同種の仕事をするのを黒人が選ぶようになってきたということだろう。ともあれ台所は黒人が妨げられることなく独創性を発揮し、自由裁量を振るうことのできるまれな空間であった。民族の生き延びる意思の象徴であるソウル・フードを次世代に伝えてゆきたいと切に願うビッグママであるが三姉妹はそれぞれ問題を抱えて対立し日曜日ごとのディナーの習慣も断絶の危機を迎える。ギャンブル好きでしばしば借金を背負い込む夫をビッグママは白人家庭のメイドやランドリーで働きながら支え三姉妹を育て上げた。ママ夫婦は生涯の夢であった自分の家も持てた。ビッグママは典型的な「強い黒人女性」である。母は一家を支えストイックな忍耐力を発揮しながら家族の者に安心感を与える一家の心の拠り所であり、逆境の中で崩壊しそうになる黒人家族を守ってゆく。思えば黒人女性は多種多様な役割を担って大衆文化の中に登場する。ある時はメイドや乳母として白人と黒人をつなぐ架け橋になり、又「まじない女」と呼ばれる民間の葉草療法師となりコミュニティに助言を与える賢者にもなる。『ソウル・フード』の冒頭、ビッグママはコミュニティの賢者としてヒロイックに登場する。一族の反対を押し切って三女ロビンは前科者と結婚するのだが、その披露宴で新郎レムはこともあろうに元の恋人とエロティックな踊りを始める。周囲が非難のまなざしで見つめる中、ビッグママはいつのまにか自分がレムのダンス・パートナーに取って代わってしまい事は丸くおさまる。いつも当意即妙の知恵を見せるビッグママをコミュニティの人々は敬意をこめて「ママ・ジョー」と呼ぶ。しかし、ビッグママも三人の娘とその家族の問題を解決してやることはできない。彼らは現代特有の問題を抱えているからだ。

テリー夫婦を除けばマキシーンとロビンの家族には経済的不安定という問題が、そんなに深刻でないにせよ存在している。ロビンの結婚式の披露宴の費用はテリーが一切出してやったものであり、ビッグママが長期入院することになった時もロビンが美容院を開いた時も妹二人に多額の出費をカバーする資力はなく、テリーに借金せざるを得ない。大きな出費の度に頼られるテリーは妹たちが感謝の気持ちに欠けていると思い、度重なる口論はほとんど金銭問題を巡ってである。どの点から見ても三姉妹のうち最も安定した家庭を持っているのは次女のマキシーンであろう。結婚後11年を経てなお夫とは深い愛で結ばれ夫の仕事も好調で子供も順調に成長しつつある。三女ロビンの家庭には夫レムの失業問題がある。微罪ながら前科のあるレムは就職する時に前科を隠していたことが露見して解雇されてしまう。その後は前科がたたって再就職の口もない。妻の美容院は成功しており、当面暮らしには不自由しないものの、腕の良い印刷工であり職人として自信のあるレムは妻のヒモのような状況に心もすさみ妻とも口論が絶えなくなる。ロビンはかねてより自分に言い寄っていた親類の男がたまたま印刷工場の重役であることからこの男に夫の再就職のあっせんを依頼し、レムは働き口を見つ



ける。しかし事の真相は程なくレムの知るところとなって妻との仲は悪化する。レムは荒れてささいな事から街中で乱闘を演じ、拳銃不法所持の現行犯として投獄されてしまう。

一見したところでは最も恵まれた生活を送っているのが長女テリーなのだが、夫マイルスとの仲は陰悪になっている。彼女はマイルスが仲間と行っているバンド活動には興味がもてず、それが趣味の範囲内に留まっている限りは許容しているが、マイルスが一流の弁護士としてのキャリアを捨ててプロのミュージシャンとして再出発する決意を固めたとき以来、夫と話し合う努力もせずひたすら夫に心を閉ざす。元恋人であるケニーが自分より妹を選んだという痛手を未だに乗り越えられずにいるテリーは登場人物中最も入念に書き込まれており、その結果我々観客にとっては最も興味深い人物になっている。前夫と破局を迎え、今またマイルスと離婚の危機が生じこのように愛情問題で挫折を味わう度にテリーはケニーと結婚できてさえいたら自分は幸せになれるだろうにという思いを抑えることができない。拒絶されるという事に耐性がないテリーは意志が強そうदैてその実三姉妹のうち最ももろい心を持っている。経済力がある為に、大きな出費がある度に妹たちも母も自分を頼ってくる。事あるごとにテリーはその事実を言い立てる。又何か一族に事がある度全て自分一人の判断で解決しようとするので妹たちは感謝するよりむしろ反発する。しかし実際のところ攻撃性は内面の弱みを悟られない為の防御本能のなせる術であろう。テリーのいところでダンサー志望のフェイスが就職チャンスを待つためにテリー夫婦の家に居候としてやってくると、テリーは彼女にも毒舌を浴びせる。フェイスがマイルスを誘惑するのはテリーに対する当てつけとしてである。

糖尿病を放置していた為にビッグママは片足を切断しなくてはならなくなり手術中に脳卒中の発作を起こして意識不明になる。彼女はやがて死亡し、長期にわたった入院の費用をどうやって支払うかという点で姉妹は又も対立する。最早修復できないかに見えた家族の関係を元通りにしようするのはマキシンの息子で小学生のアマッドである。アマッドはビッグママの隠し財産を見つけたと作り話をしてビッグママの家で日曜日のディナーを復活させるのに成功する。『ソウル・フード』はおとぎ話めいたハッピー・エンドになるのだが、それまでリアルな展開であっただけにこの結末の唐突さは惜しまれる所だ。アマッドの思いをよそに、又もや姉妹は食事中に口論を始めるがその途端に台所から火の手があがる。皆が消火にあたる中テリーが「大事な家が…」とつぶやく。両親の思い出のつまったこの家売り払い二階の叔父を養老院に送り込む事を主張していたテリーとしてはあまりにもこの発言は不自然だ。台所が炎に包まれるのを見て初めて母の家が金に変えられぬ価値があるとテリーは気づき家を売る決心を後に撤回する展開の伏線ではあろうが、それまで言動が首尾一貫していたテリーがにわかに心変わりする動機としては充分でない。観客はそこに作為を感じざるを得ない。消火活動の最中にビッグママの兄のピート叔父が引きこもっていた自室から姿を突如見せてしかもビッグママの隠し財産を預かっていたとわかるという展開にも無理がある。財産が結局は存在し、元々金銭問題で仲がこじれていた三姉妹は仲良く金を分け合い万事が解決してしまうのだ。ビッグママの家は売らずにすむし、ロビンの元には夫レムが釈放されて戻ってくる。ロビン夫婦が待ちわびる赤ん坊の誕生は一家のきずなの回復のシンボルである。テリーとマイルスが離婚するのは不自然さを少なくしようとする努力であろうが、結末の不自然さはそれ位ではカバーできない。ともあれかなり

強引に一族離別の悲劇は回避される。製作サイドはあくまで『ソウル・フード』をコメディとして全うさせたかったのであろうが、ソウル・フードが次世代に継承されるのはソウル・フードの価値を娘たちが痛感したためではない。経済的にゆとりが出たので互いに思いやりをもって接しうる心の余裕が出たためである。アマッドはソウル・フードを一族の儀式として続けてゆこうと心に誓う。その由来が証立てる彼の民族の忍耐力や独創性がアマッドに自尊心をもたらしてくれるからだ。このように文化遺産は意識的努力を払ってのみ継承されてゆく。しかし都会人のライフスタイルに於いてはますます時間が強迫観念と化し視野は狭く近視眼的になってゆく。ソウル・フードの存続は危ういといわざるを得ない。

火事と隠し財産というマジックのおかげで『ソウル・フード』の三姉妹は和解し家族の儀式は次世代へと受け継がれていく。「誰かが過ちを犯した時その非を責めても問題は解決しない。黙って手を差し伸べて問題を解決する助けになってやる。それが本当の家族ってもんじゃないか。」と、ビッグママはかつて忍耐と自己犠牲を説いた。しかし失業、不倫、離婚といった現代特有の悩みを抱えた家族の問題の前にビッグママの忠告は無力である。一族の知恵を集めてでも予測不可能で不条理な運命の前に個人は結局は無力である。できることは食事を共にし、互いの喜びを喜び、悲しみを悲しみ、一時的な慰安を与えあうことだけだ。黒人家族が現代にどう生きるかという問いに『ソウル・フード』はそう答えているように思える。

#### 注

- (1) 本田創造『私は黒人奴隷だった フレデリック・ダグラスの物語』(岩波書店, 1987年) PP. 37-38.
- (2) Sheila Ferguson. *Soul Food: Classic Cuisine from The Deep South* (New York: Grove Press, 1989) p. ix.
- (3) Ferguson, p. x.
- (4) Mary Pattillo-McCoy. *Black Picket Fences: Privileges and Peril among The Black Middle Class* (Chicago: The University of Chicago Press, 1999) pp. 117-145.

#### 参考文献

Ferguson, Sheila. *Soul Food: Classic Cuisine from The Deep South*. New York: Grove Press, 1989.

Pattillo-McCoy, Mary. *Black Picket Fences: Privileges and Peril among The Black Middle Class*. Chicago: The University of Chicago Press, 1999.

井上一馬『ブラック・ムービー』講談社 1998年

ウェッバー, トーマス・L 著 竹中興慈訳『奴隷文化の誕生』新評論 1988年

猿谷要『アメリカ黒人解放史』サイマル出版社 1968年

末吉高明「あなたがた、腹わた喰いよ!」『黒人学・入門』宝島社 1993年

スタンブ, ケネス・M 著 正田三良訳『アメリカ南部の奴隷制』彩流社 1988年

ハッカー, アンドリュウ著 上坂昇訳『アメリカの二つの国民 断絶する黒人と白人』明石書店 1994年

本田創造『私は黒人奴隷だった フレデリック・ダグラスの物語』岩波書店 1987年